

## 研究ノート

### 東海大学所蔵のインド仏典断片について

定方 晟

過日、本学の一室で「書物の文化史」という展示がおこなわれた。その詳しい日時や場所はつぎのとおりである。

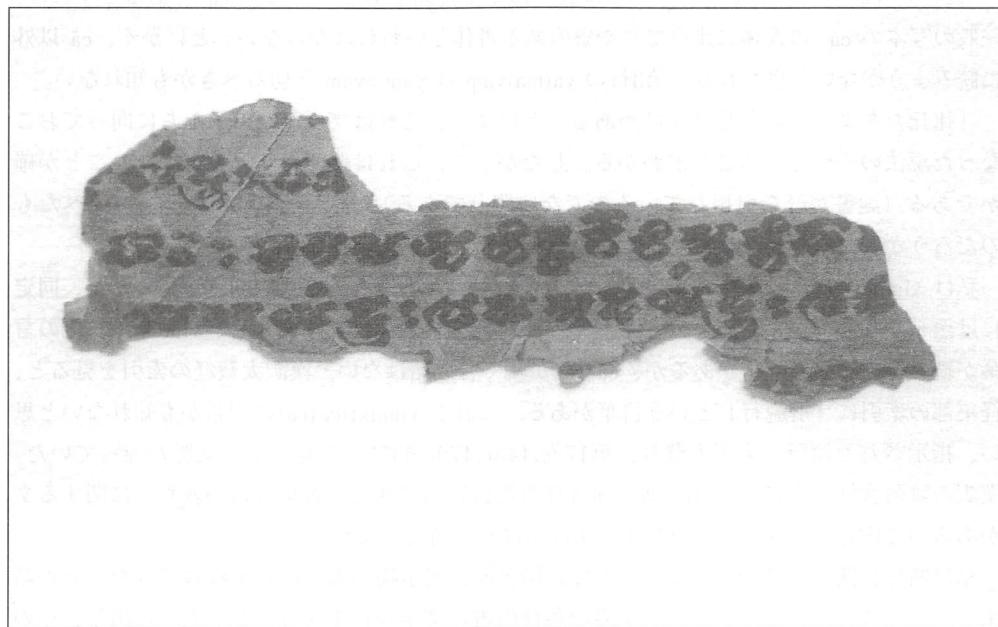
展示タイトル：書物の文化史 —— 書物探求～文字・印刷・装丁の歴史と多様性

主催者：東海大学付属図書館

場 所：東海大学付属図書館所属の湘南校舎 11号館図書館展示室

日 時：2002年5月20日～6月29日

展示物の一つに写真のような断片があり、つぎのような解説が付されていた。



10. ブラーフミー文字の例

Example of Brahmi writing on palm leaf

バーミヤン

2～5世紀

1片 Palm Leaf (貝葉資料)

後の多くのインド文字の基礎となったブラーフミー文字で書かれた、仏教文書の断片。

断片はガラスケースに納められていたが、文字はブラーフミー文字であること、その中に duhkha（苦）という文字があることがわかった。私は図書館にお願いして、展示終了後に断片を直接見せてもらい、写真を撮らせてもらった。

書体は6世紀ころのもので、ギルギット出土の写本の書体に似ていた。言葉はサンスクリット語である。断片はどの行も前後を欠き、詳しい内容は不明であるが、仏典の一部であることは明らかである。以下に、原文と和訳を示す。（ ）の中の文字は判読に疑問のあるものである。

第1行 yam duhkha(ni)

第2行 cā(rtha)ḥ katamaś ca bhikṣavo vimukticā(ra)

第3行 ya(ma)yam duhkhasamudayaṁ dukhani

第1行 苦（の滅）

第2行 （という意味で）もある。また、比丘たちよ、いかなる解脱行

第3行 苦の集と苦の（滅）

第2行の cā（二つある）については読みにやや疑問がある。これが cā であるとすれば、一般の写本の cā の書体に比べてやや癡のある書体といわねばならない。とにかく、cā 以外に読みようがないと思われる。第3行の ya(ma)yam は yam ayaṁ と切るべきかも知れない。

「比丘たちよ」という呼びかけがあることにより、これはブッダが弟子たちに向っておこなった説法の一つであることがわかる。したがって、これは経であり、論書でないことが確かである（論書が経を引用しているのでない限りである）。苦からの脱出について述べたものだろうか。大乗經典か小乗經典かはわからない。

私は vimukticā(ra)という言葉を手掛かりにこの断片と既存の經典の同定を試みたが、同定には至らなかった。サンスクリット語やパーリ語の仏教語辞典を見ると、vimukti に他の言葉が続く合成語がいくつかあるが、cā(ra)が続く合成語はない。漢訳大藏經の索引を見ると、經集部の索引に「解脱行」という言葉がある。これが vimukticā(ra)の訳語かも知れないと思い、指示された箇所（大正大藏經、第17卷,443c,479c,637b）を見たが、文脈が違っていた。漢訳の雜阿含經の卷15～卷16や增一阿含經の卷17冒頭に四諦（苦集滅道の教義）に関する文があるので検討してみたが、該当する文はやはり見当たらなかった。

私は断片に関する情報を得ようとして、図書館に展示物の入手経路を尋ねてみた。その結果わかったことは、雄松堂書店が世界の各種の古い文字資料を何セットか売りに出し、その一つを東海大学が購入し、その中にこの断片が含まれていたということであった。別のセットは他の大学が購入したそうである。

これは、したがって、特定の地域の出土品のセットではなく、世界各地の出土品が集められたいわば文字集成である。最近、パキスタンやアフガニスタンの古い仏教関係の資料がパキスタンやヨーロッパの市場に出回っている。問題の断片はその一部であるかも知れない。

このような資料はだれかに購入される前に、すでに欧米の学者によって解読されている場合が多い。この断片も解読されているかも知れない。それなら、私が解読するより、それを紹介するほうがよい。私は解明できない部分が解明されているかも知れない。私は雄松堂書店に電話をかけて、さらに詳しい情報を求めた。雄松堂書店は自分たちは米国ブルース・フェリーニ社の販売を仲介しただけなので、詳しいことは知らない、ブルース・フェリーニ社に問い合わせてみるといってくれた。数日後（平成14年5月31日）、雄松堂書店開発部の出野直子氏の名でつぎの内容のファクスが届いた。

米国ブルース・フェリーニ社の解題作成担当者について、担当者に問い合わせました。それによると、その方は楔形文字が専門の研究者であって、インドやアジアの古代文字については、詳しくないとのことで、残念ながら、先生のご希望に添うことはできませんでした。

私はワシントン大学のサロモン氏が解読しているかも知れないと思い、氏がよく利用する雑誌 *Journal of the Association of International Buddhist Studies, Bulletin of the Asia Institute, Journal of the American Oriental Society*などを覗いてみたが、関係する論文は見当たらなかった。

なお、貝葉（貝多羅葉）については同じ展示の中の別の展示物の解説としてつぎの文がある。

## 22. [Pattrā]

出版年不明

貝多羅葉

貝多羅葉（ばいたらよう）は梵語 pattrā 葉のことでシュロの葉に似て厚くて固い。これに古来インドで鉄筆などで経文を彫り付けた多羅の葉である。

貝多羅という言葉は pattrā の音訛語であり、意味上、貝とは何の関係もない。一方、貝多羅の多羅は多羅樹（tāla）のことだと解釈する人がいる。たしかに多羅はシュロの仲間であり、経文を彫り付けるのにも利用される。しかし、貝多羅はあくまでも pattrā の訛であろう。tra と tāla はインド語では明確に異なる発音であるのに、漢訛されるといずれも多羅となり、混同が生じたものと思われる。

なお、日本で寺院の庭などに植えられている多羅葉はモチノキ科の植物で、インドの多羅樹（シュロ科に属する）とは全く異なる。恐らく、インドの文物にあこがれる仏僧が、大きな葉をもつ日本のその樹を多羅に見立てたのであろう。種の全く異なる日本の植物を形態の僅かな類似から仏典の植物に見たてた他の例に沙羅や菩提樹がある。